

国語部会

金田一清子

教材を手にも、 教師自身が自由に楽しい授業づくりを

新しい教科書は、どうなっているか？

今年度は、小学校の新しい国語教科書の批判・検討と授業づくりについて研究を進めてきました。

全体の傾向の一部を紹介します。

・学び方のパターン化とヒントいっぱい
「学習の手引き」。これでは教師は必要ないのでは。

・提示された課題に沿って読んでいくことを要求され、書かれていることが見つけられればよい。

・誰かが疑問に思ったり納得できなかったりしても、それを取り上げて討論し、みんなのものにしていくという学習方法ではない。つまり、書かれている題材を認識の段階まで深めることは要求されていない。

・文学、説明文、論説文を読むとき、教材に取り上げられている文章は、読み深めることで個人の中に認識として定

着することは考えられていない。教材文は、書かれていることを知るための素材に過ぎない。情報を得るためのものになっている。

・作文では、観察文、記録文、報告文のみで、自分や自分の生活を見つめる生活文や児童詩はほとんど見られず、自分の気持ちや考えを表現する機会が少なくなる。

・指導の内容、方法までも画一化され、学習指導要領の縛りが見られる。

このような教科書を使って「どのよう
に国語の授業を作っていたらよいか」、
実践レポートをもとに考え合う部会を多
く持ちました。

まず、「一つの花」の教材分析から始め
ました。「教材研究をするのはとてもよい。
何度読んでも新しい発見がある」「教材を
手に教師自身が自由に授業ができるよう
にすべきであって、『手引き』が授業づく

りの妨げになってはならない」「例え『手
引き』をもとに表を作らせたとしても、
何のための表づくりなのかを考え、まとめ
て終わりではなく、まとめたことをどのよ
うに話し合いに生かすかを考え、活用す
べき」等、示唆がありました。

「一つの花」の実践報告では、「この子た
ちの読みはすばらしい。この実践の対極
にあるのが、教科書の読みである」との
意見が出されました。「子どもたちなりに
読みを楽しめたが、話し合いでどこを深
めるか、発言を焦点化させるのが難しか
った」という悩みには、「子どもにも発言を
返し、もう一度話し合うとよい」「また、
振り返りで一番印象に残っているとこ
ろはどこか、感想を書かせて補うこともで
きる」との助言がありました。

「事実を書く指導は？」というテーマの
詩の実践レポートで若い人の、「今、閉塞
感のある学校の中で、『何でも言える、書
ける、話し合える』そうした安心感、期
待の中で子どもの表現を大切にしたい」と
いう言葉が胸に迫りました。楽しい授
業を作っていくために若い人たちと共に
「授業作りの研究」を進めていきたいと思
います。

(共同研究者)